

# 靈感と比喻

——表現価値から見たホプキンスの比喻表現——

山田 泰広

## Abstract

Hopkins wrote that the highest language of verse was that of inspiration, which is poetry proper. A sudden brilliant idea comes to a poet's mind and becomes the germ of a poem. The poet shapes this new idea into words. Such words are often formed into figures of speech like similes and metaphors. These figures of speech are based on comparisons of one thing to another thing of a different kind, and such figurative languages can move us deeply, as far as the combination in a comparison is fresh. In a fine piece of work every beauty strikes us by surprise. According to him, therefore, the unexpected combination of things in simile and metaphor is essential to the language of poetry.

However, we need another focus of attention to evaluate the use of simile or metaphor as a whole. Figures of speech impress us not only by the unexpected but apt combination in comparison. We can feel the aptness when we come to the understanding of the deep insight shown in the discovery of the combination. Then we feel sympathy with what the poet feels and thinks. This is an important part of the function of simile and metaphor in literature, so we should examine simile and metaphor in Hopkins from two points of view: the freshness and aptness of the combination in comparison.

## 1. はじめに

私たちが詩 (poem) を読む喜びは総体としての言語表現に反応する時に

生まれる。英国で書かれた伝統的な詩は一定の韻律法に従って作られた定型詩、いわゆる韻文（verse）である。英語の韻文は詩脚の規則的な反復を基本とするリズムを特徴とする。従って、韻文を読む喜びは第一にその言語の音韻の側面に反応する時に生まれる。

しかしながら、韻文の特徴は詩の特徴の全てではない。詩は単語の組み合わせでできている。単語は、それが属する言語のコードを共有する者の間で、その組み合わせや使われる場面によって一定の意味を伝える。従って、私たちが詩を読むもう一つの喜びは、その言語の意味的側面に反応する、すなわち意味を理解する時に得られる喜びである。実際、私たちがより大きな喜びを感じるのはこの面においてである。詩には韻文で書かれていない詩、いわゆる自由詩（free verse）があるが、そのような詩は、語を音韻上規則的に組み合わせただけでもたらされる聴覚的美感が必ずしも詩に必須の効果ではなく、語の組み合わせで明示されたり暗示されたりする意味を理解することでめたらされる認知的的美感こそが詩が狙いとする効果の焦点であるという詩の見方の産物である。

詩人がその表現において比喩を重視するのは、比喩がまさしく意味の了解にその効果を負う修辞法だからである。あるものを指示する語句とそれに似たものを指示する語句の組み合わせによって、その言語表現はあるものについての感じ方・考え方を示す。読者はその表現を媒介してその見方を理解し、その捉え方に反応するのである。

19世紀に英語で詩を書いた G. M. ホプキンズ（Gerard Manley Hopkins, 1844-89）は「スプラング・リズム」（sprung rhythm）というリズムに関する独自の理論で知られるが、その詩の表現における最大の特徴は比喩表現の面白さにあると考えられる。本稿では、主要な作品のいくつかを取り上げ、比喩の創造・選択についてホプキンズが何を基準としていたかを明らかにする。

## 2. パルナシアン表現

1864年9月10日付の書簡で、二十歳のオックスフォード大学生ジェラード・マンリー・ホプキンズは、ワーズワス（William Wordsworth, 1770-1850）の死去に伴って1850年に第十二代英国王室付き桂冠詩人（the Poet Laureate）に選出された大詩人テニソン（Alfred Tennyson, 1809-92）を「疑い」始めたことを友人に打ち明けている。

人はテニソンが他の詩人よりいつも新しく、「感動的で」、人間的な病に患わされることもなく、けっしてパルナシアンを使うこともないと考えてしまい、その考えから抜け出せなかったように思います。少なくとも私はそのように考えてきました。テニソンがパルナシアンを使うとわかったからには、彼は私たちがテニソン風と呼んできたものであると認めなければなりません<sup>1)</sup>。

パルナシアンとは、ホプキンズによれば、「靈感に溢れた詩が書かれる精神状態を必要とせず、詩人の精神のレベルで、またそのレベルから語られる」（*FL*, p. 216）ものである。「偉大な詩人がその高揚状態で、また他の偉大な才能の間に占める座にふさわしい者として語るけれども、飛翔して歌う言葉ではない」（*FL*, p. 216）。「書いていくうちに自分のパルナシアンの言語を形づくり、ついにパルナシアン風にものごとを見、パルナシアン語で描くことができ、それ以上靈感を働かせる必要がなくなる」（*FL*, p. 216）。つまり、偉大な詩人が陥るマンネリズム（型にはまった手法）のことで、最も厳密な意味で詩ではなく、人を飽き飽きさせ、「たくさん使うと詩人の水準を落とし、詩人の名声を落とす」（*FL*, pp. 221-22）ものである。「ワーズワスほど人を飽き飽きさせる著述家はいない……それは彼が耐え難いほど多量のパルナシアンを書いているから」（*FL*, p. 218）だと若きホプキンズは述べている。そうではないと思ってきたテニソンがパルナシアンを使っているとわかって、

彼の作品を疑い始めたのである。

ホプキンスはテニソン風の型にはまった見方、描き方（語り方）の実例として挙げているのはこの書簡が書かれた 1864 年に出版されたばかりの物語『イノック・アーデン』（‘Enoch Arden’）にある熱帯の鳥を描いた次のような表現である。

The slender coco’s drooping crown of plumes  
The lightning flash of insect and of bird  
The luster of the long convolvuluses  
That coil’d around the stately stems, and ran  
Eve’n to the limit of the land the glows  
And glories of the broad belt of the world.

(‘Enoch Arden,’ ll. 574–79)<sup>2)</sup>

まず、上記引用の 1 行目にあるココヤシの葉が茂る様子を鳥の冠毛に見立てた表現について、「まったくのパルナシアンで、選ばれている語彙、描き方は美しく申し分ないが読む者を感動させない」（FL, p. 218）とホプキンスは評している。次に、2 行目の昆虫や鳥が一瞬のうちに飛び去っていく様を稲光に見立てた表現は「なおいっそうパルナシアン」で、続く 3 行のヒルガオを描いた部分についても、「そのイメージは美しく想像する人を感動させるが、イメージが感動的なのであって、語彙はパルナシアンである」（FL, p. 218）と自分の意見を述べている。最後に、引用の最後の句についても、最もテニソン風の慣用表現になっているのではないかと疑念を呈している<sup>3)</sup>。

この一節についてホプキンスが物足りなさを感じているのは、表現がマンネリ化して新たな感動を呼び起こさないという点である。いくら言葉巧みに語られていても、靈感の働きを必要としないいつもどおりの見方・描き方は読者に飽きられてしまう。そんな兆候がテニソンにあると指摘しているのである。

### 3. 靈感の比喻とパルナシアンの比喻

ホプキンズによれば、最高の詩、本物の詩は靈感と呼ばれる精神状態、「精神が並はずれて敏感になっている状態」(FL, p. 216) で書かれる。その状態で頭脳が能動的あるいは受動的に働き、詩の種子となるアイデアを呼び起こす。『イノック・アーデン』からの引用では次の表現がその例とされている。

The mountain wooded to the peak, the lawns  
And winding glades high up like ways to Heaven

(‘Enoch Arden,’ ll. 572–73)

「曲がりくねって山の頂上へと至る林間の空き地」(“winding glades”)を「天国への道」(“ways to Heaven”)のようだとする表現について、「アイデアが新しく、靈感によって生まれたもの」(FL, p. 218)とホプキンズは考えている。この場合、彼にとっては、発想、つまりものの見方についてのアイデアが新しいことが本物の詩の条件になっている。上の例について言えば、「林間の空き地」がいくつも山頂へと続く様子を説明するのに「天国への道」を連想したのが、テニソンのアイデアとして、新しいということであろう。「靈感に溢れた見事な作品では、あらゆる美はあなたにいわば不意打ちを食らわせます」(FL, p. 217)ともホプキンズは言っている。靈感によって生まれた表現はその予期しない美によって人を驚かす。それが感動の意味であると言える。

ここでホプキンズが靈感から生まれた表現の例として挙げたのは、表現形式から見れば修辞学で言う直喩である。直喩とは、ものごと【X】の様子を表現するために、【X】は【Y】のようだ、【Y】にそっくりの【X】という具合に別のもの【Y】に喩える形式の文彩で、英語では【X】と【Y】が‘like’, ‘as’, ‘as if’, ‘than’, ‘similar to’, ‘resemble’, ‘seem’のような比較を表す語によって結

びつけられる<sup>4)</sup>。上の例では、曲がりくねって高く山頂へと登っていく【X：林間の空き地】が何本もあるのが見える感じを伝えるのに、頂上へ向かうという特徴を共通点とする【Y：天国への道】との類似に言及している。【X】の様子を言葉で伝えるのに似たものとして【Y】を選んだのは、頂上へ向かうという客観的特徴とともに、神秘的なものへの期待感を掻き立てるという主観的特徴もあるからであろう。その点にこの表現の新しさと感動の要因がある。【X】について扱うことが新しいのではなく、【X】について伝えるのに【Y】と組み合わせたという点が発想として新しいのである。

一方、【X：ココヤシの樹幹頂部に着生している羽状葉】を【Y：鳥の毛冠（“crown of plumes”）】に見立てた表現は形式上隠喩と呼ばれる文彩で、比較を表す語句を使わない比喩表現形式である。【X】と【Y】の共通点は、ものの頂上部にあるということと、毛状と呼ばれる形状を持つという特徴である。この場合、客観的な形状の類似に焦点があって、美的価値の類似が強調されている訳ではない。【X】について伝えるのに【Y】と組み合わせるのは、「羽状葉」という語が植物学の世界で使われていることからわかるように、発想として特異なものではない<sup>5)</sup>。言わば、想定内の組み合わせである。

同じ書簡で引用されているワーズワスの詩句についても同じことが言える。

Yet despair

Touches me not, though pensive as a bird

Whose vernal coverts winter hath laid bare.

（“Composed near Calais, August 7, 1802,” ll. 13-14）<sup>6)</sup>

この詩句について、「美しいが、あまりにもワーズワス的で、あまりにもしつこいほどワーズワス風のものの見方」（*FL*, pp. 219-20）を表している、とホプキンスは評している<sup>7)</sup>。その見方は、形式的には擬人法と直喩で表現

されている。【X：絶望】を【Y：ものに触れる人】に見立てる見方、そして【X：物思いに沈む自分】を【Y：冬になって春の毛が抜けてしまった鳥】に似ているとする見方である。前者はともかく、後者の組み合わせがいかにもワーズワス風の発想だと言うのだろう。

#### 4. 詩の表現価値

このように、ホプキンズによれば（少なくとも若き日のホプキンズによれば）、韻文の言語として最高のものは靈感の言語で、それこそが本当の意味での詩である。本物の詩が書かれるには靈感が必要だという考えである。靈感によって新しい発想が生まれる。新しい発想はものの見方、主に比喻表現における組み合わせに関するものである。習慣的なものの見方は靈感を必要としない。いくら使う言葉が美しくても、見方が固まってしまった表現は読者に感動を与えない。新しい発想を基にして生まれた表現が靈感の言語であり、本当の詩の生命なのである。よって、人の心を動かす表現の有無こそがホプキンズが詩や詩人を評価する際の基準となるはずである。

しかしながら、詩句の表現価値を読者に与える感動、すなわち効果という観点から考えた時、発想の新しさに起因する驚きだけで判断するのは一面的になってしまう。その新しい発想の内容である二つのものの組み合わせがその表現によって伝えたいこと（表現主体の感じ方あるいは考え方）を伝えるのに読者にとっても妥当・適切なものと共感されなければ読者に感銘を与えることはできない。発想の新しさと組み合わせの妥当性が詩句の表現価値を決めるのである。

翻って、ホプキンズ自身、自分で詩を書く際にその価値基準に拘束を受けることになるのは当然であろう。心に触れる表現の基になるものの見方、喻えられるものである【X】と喩えるものである【Y】の組み合わせは靈感から生まれた新しいものを含まなくてはならない。また、読者にその結合の根

抛となる類似性を理解してもらえ、妥当な組み合わせと判断され、感銘を与えられるものでなければならない。詩を書き続ける限り、パルナシアン誘惑を避けて、次の詩の誕生の契機となる靈感の突然の予期せぬ到来を待ち続けることになる。「健康状態」や「環境」が原因でそういう精神状態になる可能性があるとはポキンズは述べているが、実際のところ、これは僥倖、偶然の幸運を待つということである<sup>8)</sup>。

## 5. 「明るいソネット群」における比喩

1877 年は詩人ポキンズにとっての「驚異の年」(annus mirabilis) と言われている。ウェールズ北部にあるイエズス会の聖職者養成機関セント・パイノズ・カレッジで神学を学んでいた時である。この年、彼は『神の壮麗』(No. 111 ‘God’s Grandeur’), 『星明かりの夜』(No. 112 ‘The Starlight Night’), 『戸外のランタン』(No. 113 ‘The Lantern out of Doors’), 『春』(No. 117 ‘Spring’), 『エルウィーの谷間で』(No. 119 ‘In the Valley of the Elwy’), 『海とヒバリ』(No. 118 ‘The Sea and the Skylark’), 『チョウゲンボウ』(No. 120 ‘The Windhover’), 『まだらの美』(No. 121 ‘Pied Beauty’), 『籠のひばり』(No. 122 ‘The Caged Skylark’), 『収穫の歓喜』(No. 124 ‘Hurrahing in Harvest’), と立て続けに 10 篇の魅力的なソネットを作っている<sup>9)</sup>。神学生として過ごした北ウェールズの風土とそこでの生活はいくつもの美しいソネットの誕生に決定的な影響を与えている。「修道院は急勾配の丘の上に立ち、海まで長く伸びているクルイド川の谷の広大な眺めを見渡せます。ちょうど今くっきり姿を見せていますが、天気次第で見えたり見えなかったりするスノードンとその連山が向かいにあります。空気はとても新鮮で健康によさそうです」(父宛書簡, 1874 年 8 月 29 日)<sup>10)</sup>。「ウェールズの景色は非常に魅力があり、現に今見えているように雲がかかっていないスノードンや近くの山々を目にすると心が躍ります」(母宛書簡, 1874 年 9 月 20 日)<sup>11)</sup>。「谷はこれまでになく魅力的で感動



的に見えました。ある意味で、クルイドの谷に勝るものはこの世にはありそうもありません。その日は今にも降りそうに曇っていました。海や遠くの丘は紫に縁取られ、雲は低く垂れこめ、くっきりしているが落ち着いた風景でした」(同, 1876年3月2日)<sup>12)</sup>。これらの書簡で紹介されている好ましい自然環境がホプキンスの精神に働きかけて、例えば『エルウィーの谷にて』や『収穫の歓喜』のアイデアを生み出したと言えるだろう。環境に恵まれ、靈感にも恵まれたのである。

こうして誕生した作品は「明るいソネット群」(The Bright Sonnets)と呼ばれて彼の詩人としての業績の大きな部分を占めている。これらの作品にはそれぞれ新しい発想に基づく比喻表現が多々見られるので、その例をいくつか紹介する。

まず直喩の例から見てみよう。

The world is charged with the grandeur of God.  
It will flame out, like shining from shook foil;  
It gathers to a greatness, like the ooze of oil  
Crushed.

(No. 111, ll. 1-4)

ここには直喩形式の表現が二つある。一つは「神の偉大が顕現する様子」を「振られた金箔がきらきら光る様」に喩えたもので、もう一つは「神の偉大が大きくなる様子」を「オリーブが圧搾機にかけられてオイルが滲み出す様」に喩えたものである。【X：偉大(“grandeur”)という価値判断を表す抽象観念】と【Y1：発光する金箔】および【Y2：滲み出るオリーブオイル】という具象物の組み合わせはそれまでにない発想である<sup>13)</sup>。

Look, look: a May mess, like on orchard boughs!

Look! March-bloom, like on mealed-with-yellow sallows!

(No. 112, ll. 9-10)

この部分の表現は複雑で、【X：星空】を【Y1：五月の散乱状態】および【Y2：三月の花盛り】と隠喩形式で組み合わせ、さらに【Y1】を「果樹の枝に咲く花の様子」、【Y2】を「黄色い粉をかけたシダレ柳の花の様子」と直喩形式で組み合わせている。星空の見え方をそれと類似した地上の感覚的イメージで表現しているのである。

and Thrush

Through the echoing timber does so rinse and wring

The ear, it strikes like lightnings to hear him sing;

(No. 117, ll. 3-5)

この直喩形式の表現では、【X：木立の中に響くツグミのさえずり】と【Y：落雷】を組み合わせている。聴覚的印象を伝えるのにそれが落雷に遭遇した経験と刺激の感じ方において似ていると述べているのである。

That cordial air made these kind people a hood

All over, as a bevy of eggs the mothering wing

Will, or mild nights the new morsels of Spring:

(No. 119, ll. 5-7)

これは別の形の複合的な組み合わせで【X：人々とそれを取り巻く心温まる空気】が【Y1：いくつもの卵とそれを翼で包む母鳥】および【Y2：春の新しい芽と穏やかな夜】と似た一対として組み合わせられている。組み合わせの組み合わせである。【Y1】および【Y2】との取り合わせによって感じ方に

において類似した印象であることが示されている。

then off, off forth on swing,  
As a skate's heel sweeps smooth on a bow-bend

(No. 120, ll. 5-6)

【X：回転して飛び去っていく鷹】を【Y：曲線を描いてさっと滑るスケーター】と組み合わせている。それによって、その動きの客観的な運動のイメージに颯爽としていたという美的印象を加味している。

For skies of couple-colour as a brindled cow;

(No. 121, l. 2)

【X：二色の空】と【Y：ぶちのメウシ】の組み合わせの根拠はどちらもまだら模様ということである。この組み合わせが選ばれたのは、それだけでなく、タイトルにあるように、どちらもその模様が美しいという価値の類似性があるからである。

As a dare-gale skylark scanted in a dull cage,  
Man's mounting spirit in his bone-house, mean house, dwells—

(No. 122, ll. 1-2)

【X：卑しい骨の家に住む人間の精神】と【Y：鬱陶しい鳥籠に閉じ込められた野生のヒバリ】の取り合わせは宗教詩には先例がありそうである。

同じ詩にもう一つ複合的直喩形式の句がある。

Man's spirit will be flesh-bound, when found at best,

But uncumbered: meadow-down is not distressed  
For a rainbow footing it nor he for his bones risen.

(No. 122, ll. 12-14)

【X：復活した肉体によって苦しめられることのない靈魂】と組み合わせられているのは【Y：虹の裾がかかっても重さを感じない緑の大地】で、この発想は斬新である。靈魂との関係における復活後の肉体の特徴を強調するために大地に重量上の負荷を与えることのない虹と比較しているのである。

And the azurous hung hills are his world-wielding shoulder  
Majestic—as a stallion stalwart, very-violet-sweet! —

(No. 124, ll. 9-10)

ここでの組み合わせは【X：裾が霞んだ遠くの青い山並み】と【Y：造りのがっしりとした種馬】で、「堂々とした」という価値判断を含む語が表す印象が二つのものを結びつけている。

次にこの時期の作品から組み合わせが斬新な隠喩形式の比喩表現をいくつか見ておこう。

Ah well! it is all a purchase, all is a prize.

Buy then! bid then! ---What? ---Prayer, patience, alms, vows.

(No. 112, ll. 9-10)

ここでは、【X：夜空の星を見ること】と【Y：オークションに参加することあるいはショッピングをすること】が組み合わせられている。「星の眺め」

が「商品」であり、「祈り、忍耐、喜捨、誓願」が「代価・貨幣」である。修道生活に関係した行為や能力を貨幣に、また美しい星空の眺めをそれによって得られる価値のある商品・褒美に見立てた発想は意外性がある面白い。

I caught this morning morning's minion, king-  
dom of daylight's dauphin, dapple-drawn Falcon in his riding

(No. 120, ll. 1-2)

次は【X：大気の流れに乗って悠々と空を飛ぶ鷹】を馬上の【Y1：権力者の寵臣（“minion”）】および【Y2：王国の王太子（“dauphin”）】と呼んでいる。乗馬姿の高貴で堂々とした印象を伝える比喻である。

The heart rears wings bold and bolder  
And hurls for him, O half hurls earth for him off under his feet.

(No. 124, ll. 13-14)

この表現は【X：詩人の高ぶる心】を【Y：大地を飛び上がろうとしているペガサス（のようなもの）】と組み合わせた発想から生まれたものである。心を鳥に擬えることは、例えば『ドイッチュランド号の難破』（The Wreck of the Deutschland, Stanza 3）でも見られるようによくあり、ペガサス（のようなもの）に見立てることもそれほど意外ではない。注目すべき点は、その離陸時の力強さを強調していることである。“bold”という価値判断を示す語は、「恐れを知らない、大胆な」という肯定的印象と「不遜な」という否定的印象を表す語であるが、この詩の文脈では「大地を強く投げつける」（“hurl the earth”）という表現が続くことからわかるようにその高揚する精神のダイナミックな動きを、天をめざすペガサスと組み合わせることで肯定的な意味

合いを与えている。

They rain against our much-thick and marsh air  
Rich beams, till death or distance buys them quite.

(No. 113, ll. 7-8)

【X：不快な世の中の雰囲気】を【Y：澱んだ沼地の空気（“much-thick and marsh air”）】と組み合わせ、【X：美しい肉体や精神を持った人々が世の人々に与える心理的効果】を【Y1：雨（“rain”）】および【Y2：豊かな光（“Rich beams”）】と組み合わせている。組み合わせが1対2と複合的になっている。現世を沼気（メタン）の漂う視界不良の地に、また現世にいる美しい肉体や精神を持った人々を不快な地を照らす豊かな光をもたらし光源にそれぞれ見立てている。聖書（マタイ、5章）には「あなたがたは世の光である」という有名な喩えがあるので、人を光と結びつける発想はキリスト教徒にはなじみ深い。それだけでは意外性がないので、さらに現世を沼気が漂う視界不良の地と組み合わせたのである。後者には否定的な印象があるので、それを背景にすることで前者の肯定的な印象が強調されている。

以上見てきたように、ホプキンズが靈感に最も恵まれた1877年に生まれた作品では、比喩表現の基になっている組み合わせのアイデアがフレッシュで、組み合わせ方法も一本調子ではない。伝えたいこと（感じ方、考え方）を効果的に伝えるために選ばれた組み合わせはその意図に沿うものにもなっている。そのような見方に驚きを感じるとともに、組み合わせの根拠となる共通点について考えさせられ、その発想の妥当性に気づかされるに及んで、その感受性と洞察力の鋭さに感銘を受けるのである。

## 6. 「恐ろしいソネット群」における比喩

しかし、1877年9月23日に司祭に叙階されてウェールズを離れてからは、靈感にはそれほど恵まれなくなる。完成した作品が書かれた年度別の数を調べてみよう。

1878年 (0) 1879年 (6) 1880年 (1) 1881年 (0) 1882年 (2)  
 1883年 (0) 1884年 (0) 1885年 (8) 1886年 (1) 1887年 (2)  
 1888年 (2) 1889年 (3) 1884年～1886年 (1)

10篇の「明るいソネット群」の書かれた1877年以降、亡くなるまでの12年間で主要作品がまったく書かれていない年が4年ある。書かれた主要作品があっても、1879年と1885年を除いて残りの6年は最大で3篇である。原因はその生活環境と労働環境および健康状態にあったと言えるだろう。例えば、1880年から81年にかけて神父として赴任したリバプールでは、「リバプールの教区の仕事は身も心も疲れさせ、私に細切れの時間しか残してくれません。その仕事には価値がありますが、そこには詩神はいません。オックスフォードを離れてから半年以上になりますが、全部で二十六行しか書いておりません。」（ディクソン宛書簡、1880年5月14日）と述べていて、詩が生まれにくい環境と生活であったことがわかる<sup>14)</sup>。

それでも、仕事と気苦労、心身の衰弱で健康状態が最悪であった1885年には8篇の主要作品が書かれている<sup>15)</sup>。そういう状況でも靈感は予期せずに彼に詩のアイデアを授けたのである。

いわゆる「恐ろしいソネット群」(The Terrible Sonnets) と呼ばれる作品群が立て続けに作られたのである。これらの作品にも新しい発想が認められるので、吟味してみよう。

まず、直喩形式の句を見てみる。

And my lament  
Is cries countless, cries like dead letters sent  
To dearest him that lives alas! away.

(No. 155, ll. 6-8)

ここでの組み合わせは【X：嘆きのとめどない叫び（“cries”）】と【Y：遠く離れて住んでいる最愛の人へ送られた届かない手紙の数々（“dead letters sent/ To dearest him that lives...away”）】である。どちらも「空しい」という価値判断を特徴としている。

もう一つ変わった形式の直喩がある。

I cast for comfort I can no more get  
By groping round my comfortless, than blind  
Eyes in their dark can day or thirst can find  
Thirst's all-in-all in all a world of wet.

(No. 163, ll. 5-8)

ここでは、“no more...than”の構文で、【X：慰めを得ようとして得られない辛い状況】を【Y1：盲人が暗闇の中で昼の光を見たいのに見られない状況】、【Y2：喉の渴いた人が大洋の真ただ中で真水を飲みたいのに飲めない状況】と比較している。

次にこの時期の作品に見られる隠喩形式の句の例をいくつか挙げてみる。

Not, I'll not, carrion comfort, Despair, not feast on thee;  
Not untwist—slack they may be—these last strands of man  
In me

(No. 159, ll. 1-3)



【X: 絶望すること】と【Y1: 腐肉のごちそうを楽しむこと】、および【Y2: 燃系をほどくこと】という取り合わせから生まれた表現である。絶望という精神の陥る状態、人間の内面的事象を「食べる」「燃系をほどく」という肉体的行為に擬える発想が新しいと言える。

My cries heave, herd long

(No. 157, l. 5)

この句では、【X: 叫びが続く様子】を【Y: 牛が列をなして進む様子】に喩えて表現している。声の類似ではなく、「長く続く」という特徴が共通点として強調されている。その一方で、「叫び」から連想する深刻な雰囲気と「牛の行列」(“herd”)から連想するのどかな雰囲気との間に対照性が感じられるので、取り合わせに意外性があるって驚きを覚える。この組み合わせを妥当と見なすには「悲劇的状況」への意図的なディタッチメントを感じとる必要がある。自分の置かれた悲劇的状況に過度に感情移入すると表現は感傷的になる。そうならないように、ディタッチメントを可能にする工夫がこの組み合わせを選んだ意図である。それがこの表現の面白いと言える。

O the mind, mind has mountains; cliffs of fall  
Frightful, sheer, no-man-fathomed.

(No. 157, ll. 9-10)

精神と山岳との組み合わせは発想としては取り立てて斬新ではない。精神には、足を滑らせたら命がなくなるような断崖絶壁、すなわち精神を死に迫いやる危険がいくつもある。精神的危機と登山の危険の組み合わせに意外性はないが、その恐ろしさのリアリティは【X: 精神世界】を【Y: 断崖絶壁のある山岳】に擬えることで表現されてくる。

I am gall, I am heartburn

(No. 155, l. 9)

【X：自我】を【Y1：胆汁】および【Y2：胸焼け】に擬えた隠喩形式のこの表現は悲痛な叫びである。自分の恒常的なアイデンティティを「苦味」「胸焼け」という味覚的に不快な自覚症状に喩えた発想は他にはない。その症状は一時的なものではなく、「私」と同一のものと感じられている。「私」は不快の感覚そのものなのである。このような発想をして表現するのは、自分の状況に救いが無いことを強調して伝えたいからである。

Natural heart's ivy Patience masks

Our ruins of wrecked past purpose. There she basks

Purple eyes and seas of liquid leaves all day.

(No. 162, ll. 6-8)

【X：忍耐（“Patience”）】を、【Y：廃墟を被う蔦（“ivy”）】に見立てる発想は、忍耐は挫折を覆い隠すものという考え方を強調するためである。忍耐という精神的能力を、廃墟を被い隠す蔦という具象的なものと結びつけた発想は内面的事象を物理的事象に擬えるという点でホプキンズらしいと言えるが、選ばれた二つのものの取り合わせは常套的ではない。

And where is he who more and more distills

Delicious kindness?

(No. 162, ll. 12-13)

【X：優しさ（“kindness”）】と【Y：蜂蜜】、【X：キリスト】と【Y：蜜蜂（働き蜂）】を組み合わせたこの発想も常識的な連想からは遠いものを結びつけ

ている。

leave comfort root-room

(No. 163, l. 10)

最後の例は、慰めという心理的なものを、成長のために根を張る植物に見立てたものである。内面的事象についての感じ方、考え方を表現するために物理的事象、感覚的に知覚可能な事象に擬えるのがこの時期に顕著に見られるホプキンズの隠喩の使い方である。

## 7. 最後の詩における比喻

ホプキンズは 1889 年 6 月 8 日に腸チフスで亡くなったが、その一か月半前に友人のロバート・ブリッジズ (Robert Bridges, 1844-1930) に宛てて『R. B. に』(No. 179, 'To R. B.') というソネットを書いている。生前完成した最後の作品である。このソネットでは前半で詩の誕生過程が比喩的に語られ、後半で自分が思うように詩を書けないのは、創造に必要な靈感に恵まれないからだと説明している。実際、1886 年以降書かれた詩はこの詩を含めて 8 篇でしかない。1885 年に最後の創作上のピークがあったものの、その後は年に 2 作程度になってしまった。事情はいろいろ考えられるが、要するに靈感が訪れなくなってしまったのである。

では、そういう状況で書かれたこの作品では靈感を受けた新しい発想はあるのだろうか。

The fine delight that fathers thought; the strong  
Spur, live and lancing like the blowpipe flame,  
Breathes once and, quenched faster than it came,

Leaves yet the mind a mother of immortal song.

(No. 179, ll. 1-4)

まず、心を突き動かす強い衝動の様子が火吹き吹管で息を吹きかけられて燃え上がる炎のイメージで表現される。この具象的な内容を表す直喩の発想は新しく、説得力があり、感銘を覚える。父である喜々とした衝動はここで消えていくが、後には精神が出来上がる詩の母として残る。【X：創作過程】を、靈感が働いてひらめいたアイデアである【Y：子供の成長】に、そのアイデアをもたらす契機となった【X：詩人の衝動】を【Y：父】に、そのアイデアを育てて作品を完成していく【X：精神】を【Y：母】に、それぞれ擬える発想に意外性があるとすれば、創作において衝動（情動）の果たす役割を父的なもの、精神の果たす役割を母的なものとする見方にある。このような見方は当時の社会的通念とは逆である。ヴィクトリア朝の英国社会のジェンダー規範によれば、理性は男性性と感情は女性性と結ばれていたからである<sup>16)</sup>。この詩の発想はその規範的見方を逆転させたものである。

Nine months she then, nay years, nine years she long  
Within her wears, bears, cares and combs the same

(No. 179, ll. 5-6)

ここでは、【X：精神の働き】を【Y：人間の女性の妊娠―出産―子育て】に擬えて擬人法で表現している。作品の完成に人間の場合と違って9年かかることもあるので、子離れまでの期間の長さが相違点として強調されている。表現が巧みで、組み合わせも妥当であるが、発想に驚きは感じない。

The widow of an insight lost she lives, with aim  
Now known and hand at work now never wrong.

詩人の精神を「直観的見通しを失った寡婦」と呼んでいるのは、詩人は「夫」である衝動の消滅とともに精神だけを頼りに、どういう作品に仕上がるかわからないまま書き進んでいくからである。しかし、やがて目標は自覚され、誤ることなく言葉は文字になる。ここでは、精神の働き方を寡婦の仕事の様子に擬えている。

この作品における比喻表現には他に、詩の種子となったアイデアが浮かんだ時の喜びを「甘美な火」(“Sweet fire,” l. 9)、「ミューズの種馬」(“sire of muse,” l. 9)と呼んだり、めったに幸せな気分を味わうことがない内面世界を「冬の世界」(“My winter world,” l. 13)と呼んだりしている隠喩形式の句がある。もっとも、この最後の句の発想は常套的で、まさにその内容にふさわしく靈感の表現からは程遠いものである。

## 8. 結び

以上から、まず、ホプキンズの詩的言語観の中核には本当の詩は靈感の言語であるという信念があること、靈感によってもたらされた新しい発想に基づく表現こそが読者に感動を与えること、その発想の新しさは比喻における組み合わせの新しさに求められることを指摘した。

次に、その観点からホプキンズの比喻表現を評価する場合、組み合わせに関するアイデアの新しさだけで表現の価値を計ることは部分的評価になること、比喻表現には感じ方・考え方の伝達という目的があるため、全体として評価するには組み合わせの妥当性、共感可能性をもう一つの表現価値の判断基準とする必要があることを提案した。

この複数の観点から実際に彼の詩を調べてみると、「明るいソネット群」の頃から晩年に至るまで、調べたほとんどの詩に基本的に新しい発想に基づ

く組み合わせで構成された比喻表現が含まれていて、それらの狙いは読者を意外な組み合わせの新しさに驚かすと同時に、その組み合わせで表現されたものの見方に共感を覚えさせて納得させることであることがわかる。人生の最後までホプキンスは、詩は靈感の言語であるとの信念に忠実であったのである。

## 注

- 1) C. C. Abbott (ed.), *Further Letters of Gerard Manley Hopkins* (Oxford University Press, reprinted 1970), p. 219. この他同じ書簡にあるホプキンスの言葉を「 」に入れて引用した箇所がいくつかあるが、上記書簡集（以下 *FL* と略す）のページ数のみを（ ）内に記した。本稿で引用したホプキンスの書簡の日本語訳は、ピーター・ミルワード監修、中村徹・高野実代訳『ホプキンス書簡選集』（京都修学社、1997）を参考にさせていただいた。
- 2) ‘Enoch Arden’ のテキストは便宜上ホプキンスが書簡に引用したもの（*FL*, p. 217.）をそのまま引用した。なお本稿で引用した詩の部分について、「 」で示した語句の訳は山田の解釈に基づく日本語訳である。
- 3) *FL*, p. 218.
- 4) 佐藤信夫、『レトリック感覚』（講談社、1980）p. 50. 志子田光雄、『英詩理解の基礎知識』（金星堂、1980 年）p. 34.
- 5) 塚本洋太郎（総監修）、『園芸植物大辞典 1』（小学館、1994）pp. 854-56.
- 6) ワーズワスのテキストも便宜上ホプキンスが書簡に引用したものをそのまま引用した。
- 7) *FL*, pp. 219-20.
- 8) *FL*, p. 216.
- 9) 引用したホプキンスの詩句の下に付けてある作品名の前の番号は Norman MacKenzie (ed.), *The Poetical Works of Gerard Manley Hopkins* (Clarendon Press, 1990) で使われている整理用番号である。
- 10) *FL*, p. 124.
- 11) *FL*, p. 127.
- 12) *FL*, p. 137.

- 13) ホプキンス自身によるこの比喩の説明が C. C. Abbott (ed.), *The Letters of Gerard Manley Hopkins to Robert Bridges* (Oxford University Press, reprinted 1970), p. 169. にある。
- 14) C. C. Abbott (ed.), *The Correspondence of Gerard Manley Hopkins and Richard Watson Dixon* (Oxford University Press, reprinted 1970), p. 33.
- 15) 1885 年に書かれたとされている主要作品は, Nos. 154, 155, 157, 158, 159, 160, 162, 163 である。そのうち Nos. 154, 155, 157, 159, 162, 163 が The Terrible Sonnets とか Sonnets of Desolation などと呼ばれている。
- 16) 例えば, 当時大きな社会的影響力を持っていた批評家で社会改良家ジョン・ラスキン (John Ruskin, 1819-1900) は, 『胡麻と百合』 (*Sesame and Lilies* 1865) で, 男性の知力は思索と発明に適しているが, 女性の知力は発明や創造には向かないと述べている。